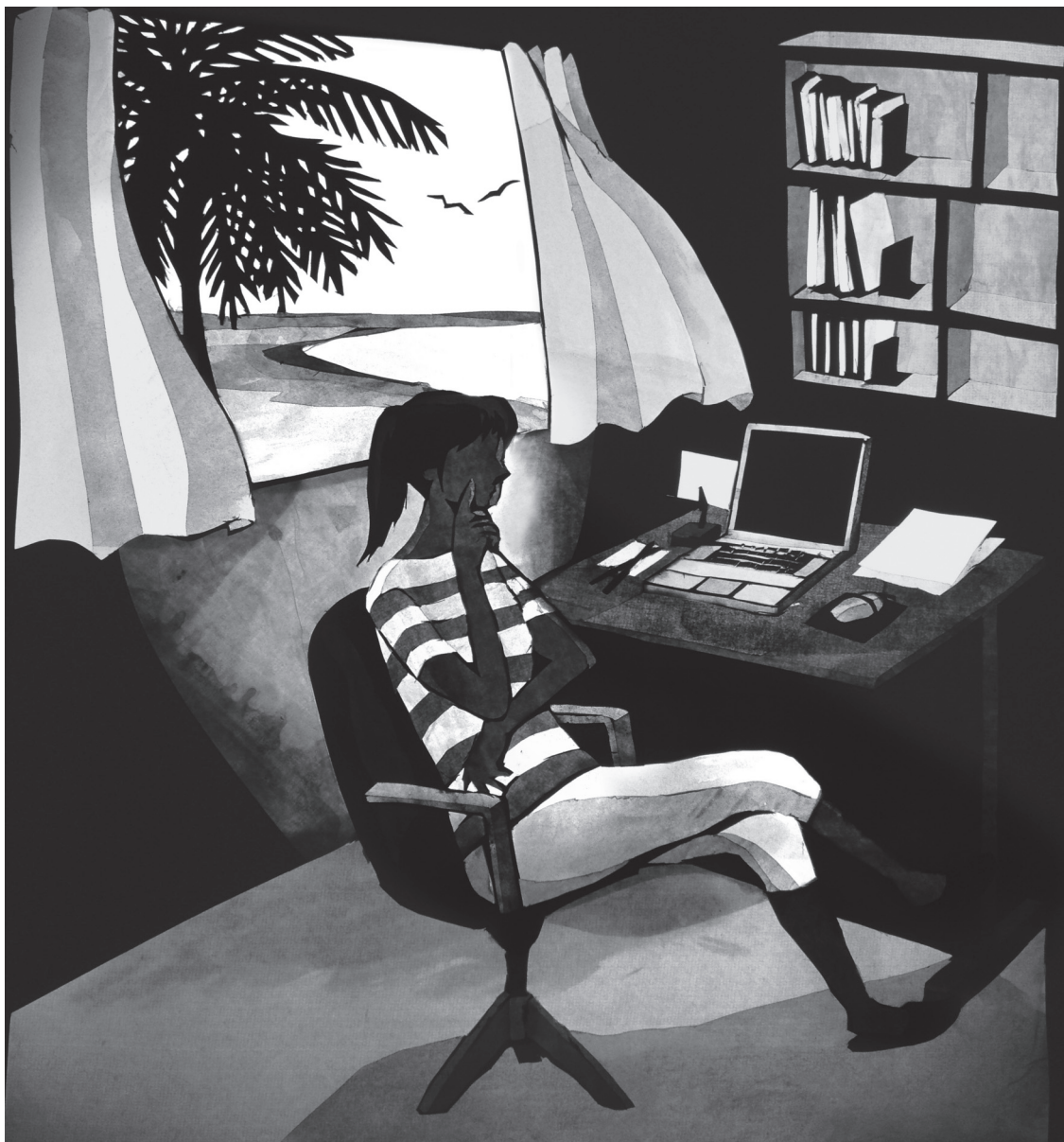


# どの方向にどう努力していくか 作家になる技術



作家になりたいなら「小説家」という肩書きのついた名刺を作ればいいという冗談がありますが、「作家になりたい」と言ったときの作家はそうした自称作家ではなく、社会的地位があり、職業的にも成り立っている職業作家、すなわち、プロ作家のことですね。

では、どうしたら作家になれるのか。「そんなの簡単、才能があればいい」と言うかもしれませんが、それは違います。才能があるから作家になれたのではなく、普通の人でも作家になれば「才能があった」と言われるのです。

ただし、普通の人が作家になるのには、才能を伸ばす才能、つまり、どの方向に向かってどのように努力していくかという戦略を立て、実行していく能力が必要です。今回はそうした作家になるための技術、方法論を特集します。

イラスト 伊藤行也

## 作家になるためのその1

# 自分に合った文学賞を選ぶべし

### 文学賞に何を求めるか

初めて小説を書き、公募ガイドを見た枚数と締切がちやうど合う賞があり、応募してみたところ受賞。とんとん拍子で人気作家に――。

本誌二十余年の歴史の中では、このような人も何人かいました。しかし、大半の人はそうはいきません。十年に一人の天才でもなんでもない私たちに、自分を知り、相手を知り、そこに向かつてさらに自分を磨くという戦略が必要です。では、最初に自分を分析することから始めてみましょう。

質問1 あなたは文学賞に応募し、その結果、どうなりたいですか？

同じ応募者でも、文学賞に求めるものは千差万別です。主だったものを挙げてみましょう。

- ①作家として生きていきたい。
- ②賞金がもらえればいい。

③受賞して本が出せればいい。

④作家になりたいのはやまやまだが、今は実力試しという段階。

### レベルに合った新人賞選び

①の方向に向かいたい人は、大手出版社が主催する新人賞がいいですね。

ここで言う大手出版社とは、賞の母体となる雑誌、たとえば「小説すばる」とか「野性時代」とかを持っている、なおかつどの書店にもある文庫のレベル、新潮文庫とか講談社文庫とかを持っている版元になります。

そうした賞を受賞すれば、単に受賞者というだけでなく、担当編集がついて二人三脚でやっていきます。担当編集は小説の編集、出版、販売のプロですから、これは大きな力になります。

このあたりのシステムは、プロ野球の高卒ルーキーが何年かかけて成長し、やがて一軍で活躍するのと似ています。とはいっても、育成の学校のようなものとは違いますので、育成してもらえないという受け身の姿勢では取り残されてしまいます。

まいます。しかし、作家として生きていきたいのなら、まずはこの受賞という門に入るのが近道ですね。

②④の方向で努力したい人は、作家デビューに直結した登龍門と呼ばれるような賞を選ぶ必要はなく、②は賞金を掲げている賞の中から、③は受賞作の出版をうたっている賞、または過去の事例からして出版する可能性の高い賞の中から、④は比較的ハードルが低そうな賞の中から、自分のレベルに合った賞を選べばいいわけです。

②④の方向は一見すると遠まわりですが、単なる賞金狙いだつたが、求められるまま次回作を書いているうちに人気作家になってしまったとか、地方発の小さな賞を獲つてはすみがつき、翌年、大手出版社の賞を受賞したというような例もあります。

「隗より始めよ」ではないですが、背伸びせず今の自分に合った賞から始めるというのもひとつの手ですね。

### 求められるジャンルにも注意

どの文学賞に応募するかを考えると、どんなジャンルの小説なのかも重要になります。いくら優秀な作品であっても、ジャンル違い、系統違いというのでは受賞は難しいですね。

賞のタイトルに「ファンタジー」「ミ

### 職業作家とプロ作家

本来は職業でないもの、たとえば絵や写真を生活の手段とする者は、かつては職業画家、職業写真家と言ひ、芸術家としての画家や写真家と区別しました。

職業作家、つまり今で言うプロ作家も同じで、かつては仕事として小説を書いている人――明治期であれば戯作家、大正以降は大衆小説家を指しました。

かつての職業作家というと、生活のために仕方なく書いていた、割りきって書いていたという印象があり、社会的な地位も低かった印象があります。漫画「三丁目の夕日」に出てくる駄菓子屋の店主、茶川竜之介さんがそうですね。

茶川さんは東大文学部出身、芥川賞連続29回落選という設定で、本人の志望は純文学ですが、口には糊するために少年向けの冒険小説を書いていきます。

しかし、少年読者のファンレターにやる気になり、連載小説が単行本化されて有名人扱いされたりして、大衆小説を一段低いものと見ていた自分を反省するのですが、当時はことほどさように小説と言えばイコール純文学の時代でした。

しかし、「芸術性／商業性」という二項対立の時代は終わりました。一部にはまだ商業性ゼロの実験的小説や文学性ゼロのポルノ小説もありますが、大半の小説には芸術性と商業性の両面があります。それはプロ野球選手は職業として野球をやっている、決して見せ物ではないというのと同じです。

ステリー」「ホラー」のように表示されていけばジャンルを間違えることはないはずですが、問題は純文学系ですね。

今は純文学とエンターテインメント小説の境界はないに等しいのですが、新人賞の場合にはなぜか純文学系と言われるものがあり、それは文藝界新人賞、新潮新人賞、群像新人文学賞、文藝賞、すばる文学賞など、狭義の文芸誌（文学研究を主眼とする雑誌）を母体とする賞。および、太宰治賞です。

勘違いしやすいのは、「小説すばる」や「小説新潮」など「小説○○」とつくもの。これは文芸誌というより読み物。「オール読物」も広義には文芸誌ですが、誌名の通り、内容はエンターテインメント系の小説が中心の読み物です。

雑誌の趣旨や傾向は、そこに掲載された小説や執筆陣の顔ぶれを見ればだいたいの推測できます。新人賞はその亜流のような作品を求めるわけではありませんが、仮に時代小説専門の雑誌があり、「時代小説新人賞」という賞が創設されたなら、

## 作家になるためのその1

- ・自分に合った文学賞を選ぶ
- ・ジャンル違い、系統違いに注意
- ・誰のために書くのかを考える

純文学では受賞するはずがないと気づいてください。公募というのは、主催者が求めているものをいかに洞察するかを競うものでもあるのです。

主催者が何を求めているのかがよく分からな人は、分かるまで過去の受賞作または同じ系統の小説を読みましょう。同じミス터리でも、謎解き中心の本格推理を求めている賞と、サスペンスを含む広義のミス터리でもいい場合があります。読めばその違いが実感できます。頭ではなく体で覚える感じです。

というより、ミス터리ならミス터리、ファンタジーならファンタジーを読み過ぎて、それが高じて書き手になってしまおうというのが普通であり、良き読者でない人が良き作家になることはないと思っただけが賢明でしょう。

## 誰のために書くのか

もうひとつ、別な角度から同じような質問をしてみましょう。

質問2 あなたは、どのような作家になりたいと思いますか？

- ⑤ 自分が書きたいことを書く作家
- ⑥ 読者が読みたいことを書く作家

⑤と答えた方が圧倒的多数だと思います

す。誰だつて自分自身が書きたいと欲するものがあつて作家を目指したはずですから、それは当然でしょう。

そのこと自体は問題ありませんが、書かれたものが、結果的に、「他人が読んだらつまらない」「他人が読んでおもしろい」「他人が読んでおもしろい」かどうかによって評価は大きく変わってきます。

戦前までは、書きたいことを書いても売れました。日本人の大半が「戦争・貧困・差別」のいずれかを経験してきましたから、この三つのどれかを題材にすれば多くの人に共感されました。

しかし、今は個人主義の時代ですから、読者に「秀作みたいだけど、私には関係ない」と思われたら終わりです。書かれたことは個人的なことであっても、不特定多数におもしろがられなければいけません。小林秀雄的に言うところ「社会化された私」ですね。

それでもなお自分の主義・主張を真正面から書きたい、赤の他人のために作り話を書く気はないという方は、それはそれでいいです。自分の過去を整理するために書いても、過去を確認するために書いても、自分が生きた証を残すために書いてもいい。しかし、それだけが目的なら第三者の評価は求めようがありませんから、職業作家になることは難しいと考えてください。

## プロ作家は「自分」は書かない

親友が過労で死んだ。クラスメイトの中で故人になったのは彼が最初だ。今までは死など遠い未来のことだと思っていたが、ふと、僕はこのままでいいの、これまでの人生はなんだったのかという思いに駆られ旅に出る……。

一読して分かるように、これは自分探しです。自分探しを書いていいですが、それで読者が楽しめるかどうか。

作家が自分のことを語る。その中に読者が読者自身を見つければ、その作品は読まれるということになります。しかし、もしも読者が「もうこの作品のどこにも自分に関係のあることはない。この作家が勝手に自分自身を語っているだけだ」と思ってしまったら、読者は離れます。自分では語っているつもりになっても、人からは耳を傾けてもらえない——そしてそのことに気がつけないという作家の悲劇、はこうして起ります。

（橋本治「他人のため」）

むろん、書きたいテーマはあるでしょうし、そもそもそれがなければ書くようなとは思わなかったでしょう。しかし、プロであれば優先すべきは他人が読んでおもしろいかどうかであり、「私」は奥に引っ込めておくべきです。「私」の濃度は、物語の背後から微かに匂うぐらいがちょうどいいと思ってください。



## 作家になるためのその2

# 己を知り、日々自分を磨くべし

### 馬齢も重ねれば強み

十代でデビューした作家の処女作は、自宅と学校、アルバイト先とその周辺が舞台で、ほんの少しの体験を想像力で広げて書いていたりします。そうした実例を目の当たりにすると、実体験などなくとも想像力があれば小説は書けるという意見にも頷けます。

しかし、その手の小説はどうしたって世界が狭くなりますし、知りもしない世界を想像力だけで書けばいつかはボロが出ます。リアルでもない。

大人なら会社員の一日を書くのは容易ですが、高校生が書いたら薄っぺらなものになりそうです。時代もの、警察ものを書いて、テレビドラマを写しとったような安っぽい感じになるでしょう。

一番いいのは、経験に裏打ちされているということでしょう。海外赴任中に自爆テロに遭った人がいたとして、それを書けばそれなりに迫力のあるシーンになりそうですが、そんな希有な体験でなくとも、十年、二十年かけて経験してきた

蓄積は大きく、それは物語性の強い小説ほど生かされます。

### 実体験でなくてもいい

作家の中には、あらゆる職業を経験したという人もいますが、それでも個人が経験できることには限りがあります。そこで疑似体験！ 他人の体験を見聞きして、自分の体験にしていましましょう。

たとえば、映画。前述の自爆テロのシーンでも、シーンを書くだけなら自分で体験する必要はなく、映画を見れば済みます、小説を読めば済みます。

百の作品を鑑賞すれば、百の人生を疑似体験できるので、これを利用しない手はありません。もちろん、創作のためにです。

具体的な数字を挙げれば、映画なら週に数本、小説なら月に五〜十冊。

ただし、娯楽としてではなく、創作の手段として鑑賞する。大事なのは、鑑賞後、テーマについて思索することと、テクニクを盗むこと。量も大事ですが、鑑賞の質も問われるのです。

## 引き出しを広げる

生涯に書くのは一作というのであれば、小説だけを読んでもいいのですが、多くの作品を書くためには引き出しがないといけません。そのためには、日頃からいろいろなことに興味を持つこと、知的好奇心を持つことです。

たとえば、趣味でテニスをしているというのであれば、歴史や戦法をはじめ何から何まで徹底的に調べる。日本の伝統芸能に興味を持ったら、歌舞伎、能、狂言、詳しく調べて実際に見てみる。脳科学が気になったらすぐにその手の入門書、専門書を読む……etc。

作家になるような人は知的好奇心が旺盛で、知らないことがあると気になってすぐに調べます。あるいは、一つのことを深く掘り下げて研究したりします。

そのときはなんの役に立つものでもありませんが、小説の構想を練るとき、あるいは書いているときなど、思わぬところで思わぬものが役に立つものです。

## 小説の知識・技術を得る

小説に関する知識も知っておきましょう。それを独力で発見できれば一番ですが、小説講座や小説指南書、文学史を学ぶのも手です。

## 作家になるためのその2

- ・ 実体験、疑似体験を積む
- ・ 引き出しを広げる
- ・ 継続的に何か書く

「小説は他人に教わるものではない」

これは一理あります。確かに、小説を読んだことがない人がいたら、その人には小説は教えようがありません。

しかし、「小説は他人に教わるものではない」というのはひとつの心構えという意味合いでもあり、教えられる知識や技術はいくらでもあるのですね。

実際、アマチュア時代に小説講座に通ったという作家はいくらでもあります。指南本を読みあさったという人も無数にいます。そもそも大学で文芸科にいた人は授業で教わっているはず。そして、先人の奥義に触れ、開眼したりしているのですね、人に言わないだけで。

文学史も知っておきたい知識のひとつです。小説は過去からの贈り物であって、私たちが書く小説には、近代文学の歴史の中で考察されてきた小説に対する考え方が生きています。描写ひとつにしても、過去の作家たちが描写とは何かと考えたその結果が反映されているのです。

文学史を学んで得られる知識はテクニ

ツクというよりは小説に対する考え方、思想ですが、これも知っておくと引き出しのひとつになってくれます。

## 一日二話トレーニング

「いざ書こうと机に向かったものの、まったく何も浮かばない。なんだかなあ」となってしまいう向きには、一日に必ず一話、簡単なお話を作ることから始めるという方法があります。

**起** お人好しの好子は隣の家の夫婦ゲン

力の仲裁を頼まれ四苦八苦。

**承** 今度は隣の夫婦から愛犬がいなくな

ったと捜索を依頼される。

**転** さらに借金まで申し込まれ、窮して

買った宝くじが当たり。

**結** 賞金を分けてあげると、それを取り

合って隣の夫婦はまた大ゲンカ。

なんだかとりとめもない話ですが、ここでは発想のメモ程度と考え、あまり細部は考えなくていいです。

たとえば、例として書いた起承転結の場合、「承が浮いているので、このこと結とが繋がるようにしよう」とか、「いきなり宝くじが当たりでは嘘っぽいので、起のどこかに、当たっても不思議ではないと思えるような伏線を張っておこう」など、書き出す前に詰めておかねばならないところは多々ありますが、一日一話、一年で三六五話作りますので、あまり凝り過ぎて長続きしません。

ここでの目的は、ストーリーを紡ぎ出す訓練をすること。完成度は低くてかまいません。筋力トレーニングと同じで、毎日やるのが肝心です。

そうして毎日お話を作るとなるとそれなりにネタを探す必要にかられ、結果、ネタを探す感覚も養われるのです。

## 字数びつたりトレーニング

もうひとつ、定期的に何かを書くというトレーニングもあります。たとえば字数は八〇〇字（原稿用紙二枚）、週に一本エッセイを書くとか。

このとき、以下の二つのことを自分に課します。

- 一、原稿には穴を空けない。
- 二、字数びつたりで終わる。

原稿に穴を空けるというのは、原稿が書けないということ。仕事ではないから、誰も尻をたたいてくれないからと、ついサボってしまう人もいます。

そのような人は締切を設けましょう。毎週土曜締切とか。毎週更新でブログを書いてもいいです。少ないながら読んで

くれる人がいると励みになります。

字数のほうは決まった字数ジャストでなくてもいいですが、最後の行は最低一文字は埋める。それがルール。

短歌や俳句もそうですが、決められた枠の中に納めるといのは書き手の能力を飛躍的に成長させます。

たとえば、バスで桟橋まで行き、船に乗り、南の島に行つたとします。題材はそのとき、船中で起きた出来事。

しかし、規定枚数が短くて全部は書けない。そうなつたら、船に乗るまでと降りたあととは省略し、船中での出来事だけを書きますよね。また、それでも字数が足りないなら、なくても話が通じる箇所を探し、徹底的に文章をシェイプアップするはずですよ。

小説以前の文章トレーニングですが、字数を決めてそこに納めるということを試してみてください。

## セルフプロデュースという発想

文学賞を持っている出版社に持ち込みをしても「賞のほうに応募してくれ」と言われるのがオチですが、文学賞を実施していない出版社の場合は持ち込みを受け付けてくれる場合もあるようです。

ただし、直接持参しないと効果はないとか。直に受けとった場合は断るにも読まなければだめ出しできませんから、

目を通してくれるというわけです。よく言われることですが、送っただけでは机の下に足置きにしかありません。

持ち込みなどできないという向きは、文学賞に挑戦します。その際、自分で自分をプロデュースしてみましよう。

出版プロデューサーであるあなたは、誰に向かって、どんな話を書けば売れる

かを考えます。それ以前に、先行商品である過去の受賞作と比べ、自作の売りはどこにあるかを考えます。売りというのは自作だけが持っているセールスポイントですね。

作家も個人事業主なら、市場に出回っている商品と同じもの、またはその劣化版を売り出そうとは思えないはずですが、作家志望の方は割と無頓着ですね。市場のことはあまり考えないようです。

もっとも、マーケティングをすればベストセラーが書けるかというところはいきません。それは理屈でヒット商品を狙っても、必ずしもうまくいかないのと同じです。

しかし、書く前に、ほんのちよつとだけ出版プロデューサー目線で考えてみてはどうでしょう。意外と簡単に「こうすれば評価される」が見えてくるかもしれません。

## 作家になるためのその3

# 敵を知る——選考のシステムを理解すべし

文学賞に送られてくる作品はいきなり選考委員が読むのではなく、下読みと呼ばれる予選委員の方がまず粗選をします。では、下読みの方はどんなふうに選考しているのか、ベテランの予選委員の方に取材を試みました。

## 予選委員匿名インタビュー

——選考の流れを教えてください。

一次選考は外部の下読みの人たちがやり、二次は編集部でやるというのがほとんどだと思いますが、二次選考も下読みにやらせるというケースもあります。最終的に編集部で4、5本の候補作に絞り込み、その作品が選考委員に送られることとなります。

——下読みというのは、どのような方がされるのですか？

このあたりのことは、村上春樹さんの『1Q84』の冒頭部分に書かれています。取材をされたものだと思うのですが、非常に正確に描かれています。だいたいこの賞でも過去の受賞者がやっているというケースが多いようです。編集部の困惑としては下読みという作業を通じて小説の勉強してもらいたいということと、

経済的な援助にあるということです。そのほかの職種はさまざまだと思います。ほかの出版社の編集者がやっているというところもあります。

——一次選考はどれくらいの期間に何本読み、何本を予選通過としますか？

長編、中編にかかわらず読む本数は50本くらいというケースが多いのではないのでしょうか。以前は通過させる本数を指定されていたことがあったのですが、今はそういうことはあまりないようです。いいと思ったら何本でもいいから通過させるようにいられています。

——一次選考では、選考基準のようなものを示される場合がありますか？

過去に一度だけありました。評価項目の書いてある選考表のようなものがあって、作品ごとに書かされたことがあります。それはエンターテインメント系の新人賞でした。評価項目は「文章力」「題材の新鮮さ」「知識の広さ」「ストーリー

## 作家になるためのその3

・オリジナリティーを磨く  
・あらすじは客観的に書く。

・一つの賞には一編で勝負する

性」「主人公の魅力」「構合力」「エンターテインメント性」といったようなものです。項目ごとに点数をつけるという形式になっていました。やっていて非常にやりやすかった記憶があります。

——どんな作品が予選を通過しますか。

一次については小説になっていければ通過します。それ以上はオリジナリティーが分かれ目になります。

——下読みをされていて、困る原稿とはどんなのですか？

ノンブルが入れてない原稿です。読んだ作品の枚数に応じて下読みの料金が支払われるというケースがよくあります。その場合、読んだ作品の枚数を申請する必要がありますが、ノンブルが入れてないところから数えなければなりません。これがけっこう面倒な作業なのです。どうかノンブルはかならず入れるようにしてください(笑)。それから原稿用紙に印字したワープロ原稿はやはり読みづらいです。綴じ方は紐を使わなくてもいいと思います。バインダークリップ(メー

## 一次選考余話

下読みをするのは、過去の受賞者のほか、批評家、書評家、フリーライター、編集部関係者と様々です。

略歴は最終学歴と現在の職業で十分です。応募歴を書くよう指示がある場合は最終選考に残ったものだけを書き、間違っても落選歴を羅列しないようにしましょう。

梗概とは平たく言えばあらすじです。

よく文庫の裏表紙のような書き方をしてる例を見かけますが、自作を称賛したストーリーを書きます。あらすじのほとんどが前半部分の筋といったアンバランスもNG。結末も書きます。

ただし、トリックやどんでん返しは必ずしも筋に含まれるものではありません。ので、はつきり書く必要はありません。

ひとつの賞に複数の作品を送る是非ですが、普通はよくないです。中山七里さんのように『さよならドビュッシー』と『連続殺人鬼カエル男』の二編を出し、二編とも最終選考に残る人もいますが、この二編はまったくタイプが違います。

一編より二編という程度の意識でやれば力が分散してしまつて両方失敗します。落選した作品を書き直して再応募するのはかまいません。そのたびに作者も作品もレベルアップします。しかし、その題材でしか書けないと思われても損です。だめなものはスパッと諦めて別の作品に取りかかったほうが得策でしょう。



カーによつては「ダブルクリップ」でいいのではないのでしょうか。

——5本残せという指示があった場合、いいものが6本あったら？

躊躇なく6本残すと思います。いい作品であるのなら残したいという気持ちは編集部も下読みをやっている人間も共通にあります。新人賞の選考は落とすためにやっているわけではないのです。有望な新人を発掘することが目的です。こんなことを言っているのかわかりませんが、よく書けた作品ならば枚数がちよつとオーバーしたくらいルール違反は目をつぶっているのではないのでしょうか。

——略歴を書かせる賞もあるようですが、どんなことを書くのでしょうか。また、なんのために書かせるのでしょうか。

略歴を書かせることについての積極的

## 文学賞応募の十戒

### 一、ノンブルをつける

ノンブルは英語で言う「ナンバー」。ページ番号のことです。忘れずに。

### 二、原稿は綴じる

原稿は事務用の黒い紐か、ダブルクリップで綴じてください。ダブルクリップは原稿の厚みに合ったサイズのもので。

### 三、余計なことは書かない

「よろしく願います」「一生懸命書きました」「設定に関する補足」「先生の

な理由はないと思います。以前、「職業・専業主婦。書くべき略歴はなし」という略歴がありました。作品はどうってことのないものでしたが、略歴のいさぎよい書きっぷりに感動したことがあります。

略歴は性別、年齢、最終学歴、現在の職業がわかるくらいでいいと思います。

——梗概はどのように書けばいいと思いますか。また、梗概は何が目的で書かせるのですか？

梗概を書くように指示されているのは、規定枚数が300枚から500枚くらいの賞ではないのでしょうか。作品のあらすじがわかればいいと思います。梗概は編集部内の議論をする際に使うのではないのでしょうか。毎回痛感することなのですが、梗概を書く能力と小説を書く資質は別なものだと思っています。梗概はおも

新刊、読みました」など余計なことは一切書かないこと。

### 四、余計なものは添えない

BGM用のCD、イメージイラストなども一切添えないこと。

### 五、過剰包装しないこと

文章系の場合は、二重に包装したり、台紙で補強したりは不要です。開封したらすぐ読めるのが理想。

### 六、原稿は市販のものを使う

団体名入りの原稿用紙は不可。ワープロ原稿は無地の用紙を使い、マス目は付

しろうく書けているのに作品はつまらない、あるいはその逆というケースはよくあります。「謎の美少女！ 奇怪な出来事が連続する洋館！ 私立探偵凸凹太郎が立ち上がった！ 荒唐無稽な本格ミステリ・ロマン！」といった宣伝文句のようなものになっているのがよくあるのですが、客観的に筋を書くこと。意外に梗概を書くのに悩む人が多いようですが、梗概の出来、不出来は作品評価にはあまり関係ないと思っています。

——ミステリーの場合、梗概にはトリックまで書くべきだと思いますか？

むずかしい問題だと思います。「すると意外な事実が判明する」といった文章でもかまわないとばかりは思っています。トリックや謎解きの部分を書いてないほうが下読みをしているほうからすれば楽

けないこと。用紙は横位置で文章は縦書き、感熱紙は不可。ゴミ、染み、髪の毛、香水などがついた原稿は論外。

### 七、有名な作品に似ていないこと

新人賞に求められるのはオリジナリティー。有名な作品に限らず、応募作品の中に似たものがあればまとめて落とされたいと思います。オンラインワンを！

八、ありきたりな設定にしない

どこかで読んだような話だとか、またこの設定かと思われたアウトと思います。個々のシーンでもどこにでもある

しいということもあります。

——同じ作者の作品が2本送られてくることはありますか。2本送った場合の印象はどうですか？

シャッフルしているはずなのに、同じ作者の原稿が4本連続したこともあります。書き手の手口や発想のパターンが見えてしまうという印象があります。2本とも傑作ということはないと思います。

——前年の応募作を改稿したもの、または別の賞に応募して落選したものを書き直して応募することについて、どのように思いますか？

書いた作品が小説になっているのならばそれでもかまわないと思います。ただ、そもそも小説になっていない作品の細部をいくら書き直してみてもあまり意味はないのではないのでしょうか。

ようなあたりまえのシーンが続くと読んでいて眠くなります。

### 九、導入部を重くしない

特にエンターテインメント系の場合、導入部で設定の説明を延々とやられるとそれだけで心が折れます。

### 十、名前に凝りすぎない

小説のジャンルによりますが、歌舞伎町のホストみたいなペンネームは避けましょう。それから原稿にはペンネームしか書かれておらず、別紙の本名と照合できないことがありますので注意！

## 作家になるためのその4

# 環境を整備、スケジュールを管理すべし

### 書く環境は整っているか

小説を書くという作業は、登山にもたとえられる長い戦いです。専業作家でも長編なら一年がかりになったりしますし、いわんやアマチュアにおいてをや。だから必要なのは根性だ、忍耐だ、信念だと言ってもいいのですが、その前に、以下の三つを実行してください。

- ① 書斎を持つ
- ② パソコンを買う
- ③ 照明と椅子を揃える

作家の中には、台所で書いた、廊下で書いた、押し入れが書斎といった武勇伝を言う人もいますが、彼らはそれでも書けた例外と考えてください。劣悪な環境では普通は書く気も失せます。

①の書斎ですが、必ずしも部屋でなくともかまいません。独り暮らしでもなければ個室はないでしょうから、居間や寝室の一角をパーテーションで仕切る程度でかまいません。要は家族の団欒や生活音

から自分を隔離できればOKです。

②のパソコンはプロ作家には必需品です。手書きのよさ、ワープロ原稿の弊害もありますが、プロになりたいなら道具には投資を惜しまないこと。

インターネットは便利ですが、できれば書斎のパソコンにはネットは接続しないようにします。サイトを覗いたり、ゲームをしてしまったらするからです。

長く書くためには、③の照明と椅子はとても重要です。光量の足らないライトでは目が疲れますし、逆に強すぎれば目が痛くなります。ライトは部屋全体と手元を照らす二つを用意します。

椅子は長時間座っていても疲れない事務用のものを入手します。見た目はよくても疲れやすいもの、そもそもが椅子ではない台座のようなものではだめです。書くとき以外でも座りたくなるようなものを選んでください。

### 仕事を持っている人は朝書け

作家が原稿を書くときの一般的なイメージは、「あるとき、天啓のようにスト

## 作家になるためのその4

- ・ 書斎、パソコンを持つ
- ・ 照明、椅子を完備
- ・ 毎日書き、完結させる

リーが降りてきて、三日三晩、徹夜して一気に書いてしまう」という感じだと思いますが、これは映画や漫画の中でそう描かれることが多いからで、プロは毎日少しずつ規則的に書きます。量産している作家でも平均すれば一日に十枚も書かないでしょう。

勝目梓『小説家』には、「毎日五時に起きて、仕事に出ていく前の二時間余りを小説の習作に当てる、ということをはじめた。それを日課としてつづけた」と書かれています。仕事を持っている人はこの方法がベストです。夜は仕事疲れもあって意外と集中しにくいものです。

朝の執筆が終わったら出勤します。通勤の途中は読書か、朝書いた小説の続きを考えます。昼食は五分で済ませ、残りの五十五分でまた執筆。このとき、朝の通勤時や勤務中にストーリーを練っておくと、すぐに続きに取りかかれます。原稿をデータで持つかネット上に保存しておけば、外出先の空き時間にパソコンやスマホで続きが書けます。

## 芸術家は職業なのか

芸術家というのは肩書きではありませんが、職業ではありません。なかには、芸術のために制作した作品が売れて、その収益で生活が成り立っている人もいますが、それはレアなケースであって、大半の芸術家は、職業的収益源は別に持っているものです。

たとえば画家。大半の人は絵では食えませんので、絵画教室を開いたり、公務員や自営業者であつたりして、なんらかの副業（収入的にはこちらが本業に近いのですが）を持っています。

小説家も同じです。年に一回、単行本を出版したとして、一冊1500円、初版発行部数が4000部、その一割を印税としてもらうと60万円。

年収60万円では主婦のパート以下、これでは家族を養うどころか、自分一人食っていくこともできませんから、副業として講演、インタビュ、雑文の執筆、文章講座や小説講座の講師、文学賞の下読み、あるいは小説とは無関係の仕事に勤しまないといけません。

もちろん、単行本の前に雑誌に書いているなら原稿料が発生しますし、単行本の売れ行きが好調なら増刷もかかります。さらに文庫になればまた印税が発生しますが、しかし、それでも年に二、三冊ベイスで出版しないと職業的には苦しい。よほどの売れっ子でない限り、時間的にも肉体的にも比較的楽な副業を持っていないとやっていけないかもしれません。



## モチベーションを保つには

人は易きに流れるものです。特に大人になると、それまでは大っぴらには飲めなかつたお酒が飲め、自分で稼ぐようになれば海外旅行、ギャンブル、レジャー、ゲーム、グルメ、合コンとやりたいことを自由にできるようになります。

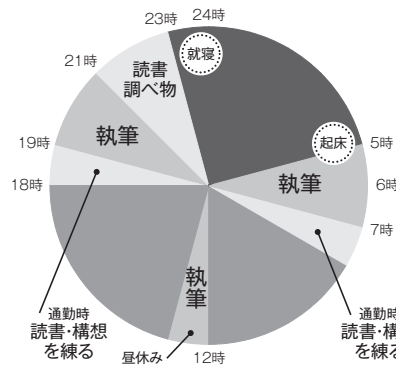
そういえば、将来の夢は作家だったなあと、よしそれならばと机に向かう

## 少しずつ書き、必ず完結させる

帰宅後はまた執筆をしますが、書いてばかりだと読書をする時間がありませんので、夜は小説を読んだり、調べ物をしたりする時間に充ててもいいです。

文学賞の締切が近くなると一作品に集中してかかりつきりになることもあると

執筆タイムスケジュール



思いますが、書いてばかりではだめ。幅広く読書をし、刺激を受け、触発され、発想を豊かにする。常に「入れる」ことをしないとすぐに枯れてしまいます。

テレビの娯楽番組は基本的には観ません。朝一からがなん小説が書けるように十一時ぐらいには寝ます。

調子が出てきたからといって何時間もおつ通しで書いてはだめです。徹夜でもしようものなら必ず反動がきて、しばらく書くのが面倒になる。そのまま書く習慣もなくなる。よくあるパターンです。

重要なのは、規則正しくやること。五十分書いたら強制的に十分休憩のようにシステマティックにやる。そのほうが結果的には長続きします。

一度書き出したら、納得できる出来にはならないと分かっているけど、必ずラストまで書き上げましょう。未完の名作を百書くより、完成した凡作を一つ書くは

うが遥かに有意義です。

休日でも朝から小説を書きます。たまには休もうとか、家族サービスもしなければとか、付き合いもあるからといった言い訳は不要です。なにしろ、天才でもなんでもない私たちが何があんでもプロ作家になろうというのですから、何かは犠牲にしなければなりません。人付き合いも大切だし、親としての責任もあるし、昇進もしたいし、趣味の時間も欲しいし、そのうえでプロ作家にもなりたいたいというのは土台無理な話なのです。

## 締切までの進行管理

日々のスケジュールの管理も大切ですが、それ以上に重要なのが賞に応募するまでの進行管理です。

ありがちなのが、締切の一週間ぐらい前までに書き上げ、そこから軽く素読み

い何かが必要です。

一番いいのは、身近に小説のライバルや友人がいること。小説のことをすつかり忘れてしまっているとき、「○○賞の二次までいったけど、まだまだだな」という報告があると、「やばい、私も書かない」と思えそうですね。

作家の自伝や指南本、あるいは小説講座も刺激になります。講座は講義もいいですが、プロの作家と直接話ができる

をして応募すればいいと甘く考えてしまうパターンです。

実はいったん書き上がったからが本当の山場です。ここから文章の推敲、テーマの推敲、構成の推敲など総仕上げをするわけですが、ここからが思いのほか時間を食うんですね。

前半が重いから大幅に削り、代わりに後半を書き足そう、ラストにご都合主義的なあと出しがあるからその前に伏線を加え、全体的に文章にスピード感を与えよう、途中で話が脇道に逸れ、それがテーマを分かりにくくしているから割愛しよう……などとチェックし、そのつど書き直し、そのつど頭から読み直しをしていると、長編なら一ヶ月ぐらいはあつというものです。

いったん書き上がったときはまだ五合目で、決して完成間近ではないという自覚を持ってください。

ころがいいですし、そこで知り合った人と「○○という本は作家志望には必読」などと情報交換するのもいいですね。

宣伝っぽくて気が引けますが、公募ガイドには作家や受賞者が登場しますから、読んでいただけ刺激になりますよね？

とにかく、身近なところにいつも自分が作家志望であったことを思い出させてくれる何かを持っていることがモチベーションを保つ秘訣です。

## 作家になるための特別編

山本甲士先生に聞く

### 全くの素人が作家になるには？

『そつだ小説を書く』の巻頭には、『全くの素人が小説を書く』と思い立ち、プロデビューを果たすまでの物語』と書かれています。著者の山本甲士さんはもともと公募ガイドの読者で、96年には横溝正史賞優秀作受賞者として「賞と顔」に登場、『そつだ小説を書く』の中にも公募ガイドが出てきます。今回は皆さんの先輩でもある山本甲士さんにメールでインタビューしました。

### 文学賞の選評は宝の山

——作家を志したのはいつでしょうか。  
また、それにはどんなきっかけがあったのでしょうか。

地方公務員として仕事を始めて三年目ぐらい(91年頃)に、仕事兼用でワープロを購入したことが直接のきっかけでした。せっかくワープロがあるので、趣味で読んでいたミステリーを自分も書いてみようかなという、割といい加減なとっかかりでした。

もう一つは、娯楽小説を乱読した中で、あまり出来のよくない小説も結構世に出てるのだなと感じており、それよりも面白いものが書けたらプロになれるかもしれないという、うぬぼれを抱いたことです。すぐれた作品に触発されたのはもち

ろんですが、駄作から背中を押されたことの方が、比重としては大きかったような気がします。

——当初は小説ではなく児童文学を目指したのでしょうか。

私のデビューは96年の横溝正史賞優秀作『ノーペイン、ノーゲイン』です。児童小説は、デビュー後に山本ひろし名義で応募するようになりました。

子供に絵本を読んでも喜ぶので、あと数年経ったら児童小説を読むようになるんだろうな、だったら何か書いておこうかな、という気持ちになったことと、山本甲士としての仕事以外にも、もの書きとしての縄張りを持つておけば、片方が不景気のときにもう片方が助けてくれるんじゃないかという打算的な考えもありました。結局、児童小説の方は尻すばみになってしまっていますが……。

——小説の講座を受講したり、指南本を読みあさったり、あるいは、プロの作家に教えを乞うたりということはされましたでしょうか。

小説講座に参加したり、プロ作家から直接教えてもらったことはありません。小説やエッセイの書き方にまつわる本は、片っ端から目を通しました。そこから吸収したことは今でも血肉となっています。

あとは、新人賞の選評ですね。作品は読まなくてもいいから、選評はできるだけ目を通しておくことをお勧めします。やつてはいけないことがよくわかる、宝の山です。

### どんどん書いて、どんどん捨てる

——アマチュア時代は一日に何枚ぐらい



山本甲士(やまもと・こうじ) 1996年、『ノーペインノーゲイン』で横溝正史ミステリ大賞(当時横溝正史賞)優秀作を受賞。デビュー後、山本ひろし名義で2004年に小川未明文学賞優秀賞、2005年にチユンソフト小説大賞金賞を受賞。

書きましたか。また、執筆には一日にどのくらいの時間をかけましたか。

最初はいきなり長編ミステリーに挑戦したのですが、仕事が終わって帰宅して就寝前にちょこちょこつと書く時間しかありませんでしたので、二枚〜五枚ぐらいいをこつこつと続けてました。時間はせいぜい一〜二時間というところだったと思います。

少しずついいから、できるだけ毎日、ワープロの前に座ることだけは心がけました。一行も書けなくてもいいので、ワープロの前にかく座る、最低十五分は他に何もしないでそこに座っている、ということ自分を課してました。習慣とはたいしたもの、そうするうちにスィッチが入って書けるようになるものです。プロになってからは、プロット作りや資料集めをする時期もあるので毎日書くわけではありませんが、いったん書き始めると、一日十枚ぐらいのペースでしょう。

——小説のトレーニングとしてもっとも効率がいよいのはどのような方法だと思いますか。

第一は、どんどん書いて、どんどん捨てることですね。最初のうちはどうしても、独りよがりな、気取った表現などを書いてしまうし、たいがい本人が思っているほどの作品ではありません。そういうものは何度手を加えてもろくな作品

にならないので、思い切って捨ててしまい、どんどん新しいものを一から書いてゆくことがトレーニングになるわけです。実際、プロになったら次々と書いてゆくことが求められますから。

あと、個人的にはテレビ放映された映画を片っ端から録画して、それを観ながら気づいたことをメモしたことが創作の役に立ちました。良作からよりもむしろ駄作から得たものの方が大きかったように思います。「ここをこうすればもっと面白くなるのに」「主人公を若い男性でなく、おばさんにしたら全く別の物語になるんじゃないか」など作品に対する不満が、新しい物語の種になることが案外多いんです。

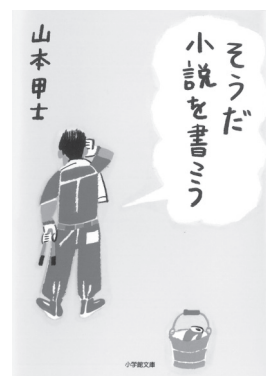
——アマチュアがやってしまいがちなテーマ、設定、書き方などをいくつか挙げていただけませんか。

●文章の基本ができてなくて、台詞が誰のものなのか、登場人物の人相風体などがよく判らない。説明文と描写の違いを知らない人が多い。

●書き手と等身大の主人公を設定するのはいいが、悩める青年のパターンばかりで退屈。

●物語を面白くするには「主人公を困難な立場に置く」という基本中の基本を知らない人が多すぎる。

●一場面一視点の原則が守られていない。神の視点は説明口調になりやすいし、



山本甲士著『そうだ小説を書く』(小学館文庫)

多視点は読者を苛々させるので、特定の登場人物の視点で描くのが基本。

●無駄な登場人物が多い。名前をつけるべき登場人物とその必要がない登場人物の区別をしていない。キャラクターの描き分けがあいまいで、次に登場したときに思い出せない。

●やたらと喫茶店やファミレスなどの会話場面が多い。

●村上春樹さんの文体を真似る人がなぜが多い。

### 選考委員に試合をさせない

——プロになったあと編集者とはどのようなやりとりをするのですか？

デビューした版元からは、受賞第一作までは面倒を見てもらいましたが、その後は連絡をもらえなくなりました。そこで、こちらから「こんなプロットを考えてみたのですが」と連絡して、一応OKをもらい、書き上げた原稿を渡したのですが「やっぱり出版しない」と言われてしまいました。

このままでは消えてしまうと危機感を持ち、片っ端から「書き下ろしのチャンスをいただけないでしょうか」という内容の手紙を添えてデビュー作を各出版社に送りました。ほとんどは返事をもらえませんでした。中には電話で「頑張ってくださいね」という電話をくれる編集者もあり、その機会を逃さず、「こんなプロットを考えてみたのですが、ご検討いただけませんか」と持ちかけて、いくつかの仕事に結びつけることができました。最初の数年はそんな感じで、何とか仕事をもらっていたのですが、そうするうちに、こちらからアプローチしたことがない出版社からも依頼の連絡をもらえるようになりました。どこかで誰かが見ていてくれてるし、読んでくれてるものです。

——96年に公募ガイドの「賞と顔」のページに出ていただいたときに、ブラジリアン柔術の戦い方を応用し、「選考委員の先生方に試合をさせない」戦略をとったと書かれていました。このような戦法、戦略についてお聞かせください。

当時のブラジリアン柔術の基本戦法は、打撃技につき合わないでいきなりクリンチャやタックルで組み付き、そのまま相手を倒して得意な寝技で料理する、というものでした。小説の新人賞も実はこの方法論は有効で、例えば警察社会の内部を克明に描いたミステリーだと、選考委員

はみんなその分野に詳しいので、いろいろと欠点を指摘されてしまうことになり、どうしても減点法の採点になってしまいます。法廷もの、ハードボイルドなどもしっかりです。

一方、選考委員がよく知らない世界を舞台にしたものを書く、欠点が見つかりにくいし、珍しさからも好評価を得られやすいわけです。私のデビュー作になった『ノーペイン、ノーゲイン』は、ウエイトトレーニングの世界を舞台にし、トリックも特殊なトレーニング器具を小道具に使用しました。そのお陰で、候補作の中でも特に印象に残ることに成功したようです。過去の乱歩賞や横溝賞の受賞作を見ても、選考委員の得意分野は避けて、舞台設定の珍しさで点数を稼いだ受賞作は多いと思います。

——アマチュアの方にアドバイスなりメッセージなりをお願いします。

アドバイスやメッセージは、ありきたりの短い言葉だけではなかなか伝えることができません。できれば拙著『そうだ小説を書く』をお読みいただいて受け止めていただければと思います。どうすれば書けるようになるのか、どうすれば面白い物語になるのか、何をするべきで何をすべきでないのか、文章技術と小説技術はどう違うのか、どうすればアイデアが得られるか、などなど、かなり詳しく紹介したつもりです。